

「10年越しの告白」

作…佐藤慎哉

【シーン1】

〈カット1〉姿見の前

藤木がスーツ姿で姿見を見ている。

姿見の前には数本のガーベラが花瓶に生けてある。

襟を正したり、ネクタイを直したりして顔を決める。

しかし、首を傾げ一度画面から消え、私服を持ってきて、

身体に当ててみる。

(以下のセリフの間、藤木は別な服を当てたり着替えたりしながら鏡で服装を確認する。ただしあまり忙しくならな
いように)

(藤木)

「10年間好きだった女性に告白する。その日が迫ってきた。

あの日、告白しなかったことをずっと後悔してきた。

高校時代の同級生。クラスでは特別目立つ存在でもなかったけれど、可愛らしくて、優しい子だった。3年生でクラスが同じになり、共に美化委員になったことで仲良くなった。じゃんけんにかけて委員になった俺に対して、校庭の花壇を好きにできるという理由で彼女は進んで美化委員になった。

当然仕事は彼女に任せっきりで、野球部だった俺は校庭の隅で花壇の花の世話をしている彼女を尻目にボールを追いかけていた。でもいつからだだったか、彼女を意識するようになった。

告白しようと思ったこともあったけれど、放課後一人で花壇をいじっているような女を選んだなんて友達に馬鹿にされそうでなかなか告白できなかった。

だから高校卒業間近、今なら付き合っても馬鹿にされるのは少しの間と思っ、彼女に告白しようと思った。

その日の放課後、俺は彼女と一緒に花壇に向かい、彼女の一番好きなガーベラの花の苗を植えていた。苗を植えて、水をやって、土を固めて、片付けをして、そして帰り際、ここだと言うタイミング、僕は心を決めた。

『あのさ……。』
でもできなかった。びびった。彼女はそのまま校舎の方に行ってしまった。

僕の後悔の念は、卒業が迫るにつれ日に日に大きくなっていった。

藤木は鏡で自分の姿を見つめている。

だから俺は高校生活も残り僅かという時、ある計画を実行した。開校90周年という節目で卒業式に埋められるタイムカプセル。そこに10年後の彼女に当てる、告白の手紙を入れた。手紙はクラスごとに割り当てられた箱の、俺用のアルミ袋の中。10年間あなたが好きでした。もし、10年後も彼女を好きだったら、タイムカプセルを開けたその時に手紙を渡して彼女に告白する。

それから俺は東京の大学へ、彼女は地元の大学に進学した。

同窓会で数回顔を合わせたけど、最近は同窓会にも参加していないので、何年も会っていない。

そして今、タイムカプセルを開ける日が10日後に迫っている。」

【シーン2】(机の前) 二、三日後
<カット1>

藤木が机に向かって手紙を読んでいる。

(手紙は縦封筒に入ったA4三つ折り)

テーブルの上には花瓶に入ったガーベラ。

(藤木) 「うそだろ……。」

タイムカプセル開封の二日前。それは母が転送してきた母校からの手紙だった。

タイムカプセル行方不明、開封行事中止!?

なぜ! どうして! なぜ行方不明! 校庭の隅に目印まで立てて埋めたじゃないか! どういうことなんだ!

本当にこんなことあるのか! こんなこと! テレビで外国人が呼ばれてダウジングをやっているのを見たことあるけど、あれはやらせじゃ

ないのか！現実にあるのか！なんでよりによって俺のタイムカプセルが！せめて全員を呼んでから見つからないことにしろよ！これじゃ彼女に会うことさえできないじゃないか！何、気を利かせてちょっと掘り起こしちゃってるんだ！

俺がこれまでどれだけ苦しんで来たことか！恋人ができて彼女のことや頭にあつて、真剣になれない、だから恋人を作をやめて、深く付き合わないようになってきた！ついこの間だって、一年付き合った彼氏を振ってまで、言い寄ってきたズボラな女を振ったばかりだ！くそお！

待て、どうする！どうやって彼女に思いを伝える。同級生に連絡先を聞いて、電話か、LINEか、いや、だめだ、なんて連絡する、10年前から好きでした、そんなこと急言ったら引かれるだけだ、会う？いや急に会おうなんて連絡したら宗教の勧誘かなんかと思われる。詳しく事情を説明するには？！あの日のこと、手紙のこと、10年間のこと・・・そうだ！年賀状！彼女から一回年賀状が来たことがある。そこに住所が書かれてた！手紙なら、手紙ならきちんと説明ができる！」

藤木は画面から消え、彼女の年賀状を探す。

そして年賀状を手に戻ってくる。

(藤木)

「あつた。あつたぞ！住所は！？(住所をみて)実家だ。数年前だがまだ実家にいる可能性は高い。それに家族だって転送してくれる。よし、よし、よし、よしよしよし！」

便箋を出し書き始める。

(藤木)

「いいぞ！いいぞ！手紙ならばびびって尻込みすることもないし、ドラマチックだ！」

『拝啓 花の盛りも過ぎ、初夏の気配が漂う季節となりました。その後いかがお過ごしでしょうか。』

だめだ！固すぎる！なんだこの書き出しは！これが好きな女の子に出す手紙書き出しか！昭和か！もっとラフな入りがあるだろ！」

便箋を一枚破り捨て、再び書き始める。

「やっほー元気？俺は元気だっぴー！
違う！（便箋を破り捨てる。）こんなラフな書き出しも違う！何年もあつてないんだ！これじゃあ軽すぎる！

（再び便箋に向かうが）くそ！なんて書いたらいいんだ！」

その時携帯にLINEのバイブ音。

藤木は無視して手紙を書き続ける。

しかし再び携帯にLINEのバイブ音。

すぐにもう一度LINEのバイブ音。

（藤木）

「誰だ！誰だ！こんな時に！母親！？」

（メッセージを見る）え！？見つかった…。中身送るって、どういう！？
（返信を打ち返すとすぐに返信が来る）もう掘り起こした！いや、だから勝手に掘り起こすな！なんでみんなを集めないんだよ！好き勝手しやがって！手紙は！？手紙は無事なのか？！（返信を打つとすぐに返事）
おお、良かった、つてちよつと待て、本人に送ったってどういうことだ！
本人に送った？彼女に！なんで！なんで勝手に送った！どうやって住所調べた！名前書いてあるけど、普通勝手に送るか！何してくれてんだよ！

いや、でもこれはこれでいいのか？別に手紙を書かなくていいし、変に思われても母親が勝手に送ったって言い訳ができるじゃないか！なるようになってるじゃないか！不幸中の幸とはこのことだ！いいぞ！かあちゃん！よくやった！母親！実家に帰ったら好きなものでも奢って、」

その時電話が鳴る。知らない番号。

藤木

「もしもし？（もしもし）はい？（陽一くん？）え？ああ、はい。（私〇〇）え！？（覚えてる？）当たり前じゃん！覚えてるよ！久しぶり。（久しぶり。ごめんね急に。）いや全然いいよ。うわ、すごい久しぶりじゃん。よく番号分かったね。（あ、番号△△に聞いた）ああ、そうなんだ……。え？元気（元気だよ。そっちは？）元気元気。・・え？どうしたの急に？（あの一、タイムカプセル。）ああ、あれね。残念だっね、みんな掘り起こしたかったのに。（うん。）え？もしかしてもう届いた？（あ、うん、）ああ、そっか早いね。（・・あの一）何？（手紙）手紙？ああ、届いちゃっ

た?ごめんね、なんかうちの母親が勝手に送っちゃってさ、びっくりしたでしょ。(ああ、うん。)ああ、そうだよ、そりゃびっくりするよね。(・・・)でもさ、(何?)あの・・・え、届いたってことはまだ実家なんだ!(そうそう)あ、そうなんだ。(うん。でももうすぐ引越すけど)え、あ、引越すんだ?なんでまた。(結婚するから)・・・え、あ、そうなんだ!!・・・おめでどう。(ありがとう)・・・(あの、手紙)ああ、そうだ、手紙ね。(10年後もって)ああ、まさか、・・・今でも好きなわけではないじゃん。(そうだよ)そうだよ。俺だって今彼女いるから、(あ、そうなんだ。)そうだよ。俺結構モテるんだから。(そうだよね。)そうよ、高校時代とは違うから。(そっか)そう、だからあの手紙いっちゃったから俺もちよど俺も連絡しなきゃなって思ってたところ。(あ、そうなんだ。)そう、だから手間省けてラッキーよ。(ならよかった、連絡したら迷惑かなと思ってたから)ううん。迷惑じゃないよ。ありがとう。(うん)・・・また今度地元戻った時にでも飲もうよ。(うん)・・・じゃあ、また。(うん、また)電話ありがとう。(ううん、)じゃあ、またね。(うん、じゃあね。)

一度携帯から耳を離すがすぐに近づけて。

あ、(何?)・・・ガーベラ好きだったよね。(え?ああ、うん。)一緒に植えたことあったじゃん。(ああ、あったね。)俺あれからずっとガーベラ好きなんだ。(あ、そうなんだ。)うん、そう・・・。(うん)うん、それだけ。(うん、ありがとう。)じゃあね、お幸せに。(ありがとう、じゃあね。)うん。」

藤木は電話を切る。

そしてそっとガーベラ見つめる。

終わり。

【LINE内容】(画面に移す必要はない。)

母「タイムカプセル見つかったって!」「よかったね!」「中身届いたから送ったよ!」

藤木「中身送るってどういうこと?」

母「学校側が集まるのもう難しいだろうからって、掘り起こして送ってくれたよ。」

藤木「手紙みたいなの入ってた?」

母「ああ、あったあった!」

藤木「一緒に送ってくれた？」

母「○○へってやつでしょ。本人に送っておいたよ（笑）」

藤木「なんでだよ！」

母「だって面白いじゃん。」

藤木「なんでやねん！」